

図形の継起に伴う 動きの方向性とイメージの変化についての一考察

門 前 豊志子

目的：異なる情緒状態において、動いている感じの投影がどのようなメカニズムでなされるのかを把握するための実験を試みてきている。その一環として、図形の継起と動きの投影の関係を検討してきているが、今回は快的な情緒状態における図形の継起に伴う動きの方向性とイメージ内容の変化に焦点をあてて検討してみることを目的とした。

方 法

対象 短期大学生 15名

情緒状態 実験的に協和音による音刺激で快状態を設定する。実験中音刺激が実験室前方のスピーカーより一定の適度な音量で継続して流され、実験的に快状態が設定される（図1参照）。

A $\downarrow = 40$

B $\downarrow = 40$

図1. 音刺激 A：協和音 B：不協和音(今回はAの協和音のみを使用)

図形刺激 15枚の簡単な幾何学図形、黒色系列と名づけた系列を使用する。この図形は白色と黒色の両方からなる図形の系列であるが、同一の図形からなる灰色系列と名づけた系列がある。今回は黒色系列のみを使用する。

実験計画 図形の継起に伴う動きの投影の変化を把握するために以下のような実験計画を立てた。

A条件—黒色図形刺激のみ7枚を提示する(図2参照)

図形番号	1	3	4	8	10	12	14
図形							

図2. A条件の図形刺激

B条件—白色図形刺激のみ8枚を提示する(図3参照)

図形番号	2	5	6	7	9	11	13	15
図形								

図3. B条件の図形刺激

C条件—黒色、白色図形刺激15枚を提示する(図4参照)

図形番号	1	2	3	4	5	6	7	
図形								
図形番号	8	9	10	11	12	13	14	15
図形								

図4. C条件の図形刺激(同一の図形で黒色と灰色系列がある)

A—B—C条件の順に実験を行うが、各条件間の実験は1週間の間隔をおいて行った。各図形提示時間は5秒/枚で、1枚提示毎に10秒間の記録時間を設定した。記録時間の中で、被験者は動きについて記述することを求められた。

実験手続き

快的な音刺激を室内後方スピーカーから実験中適度な音量でながしながら、A条件からC条件を1週間の間隔をおいて施行する。各条件とも室内中央スクリーンにスライドにて、図形刺激を5秒/枚提示した後、10秒間/枚で動きの程度、動きの速さ、動きの方向性と自由なイメージを記入する。動きの程度は動いていないから動いているまで5段階の評定尺度で評定する。動きの速さについては、動いていると感じた被験者のみが動きの速さを3段階（遅い・ふつう・早い）で評定する。同じく、動きを感じた被験者に動きの方向性について、矢印で方向性を示すよう指示される。イメージについては、動きを感じる・感じないにかかわらず自由なイメージを記述するよう指示される。

結 果

今回は方向性とイメージが継起と共にどのように変化するかを検討した。

1. 条件別方向性の結果は図5、図6、図7、に示す通りである。
2. 条件別イメージの結果は図8、図9、に示す通りである。
3. 条件別図形刺激の特徴とイメージ内容との関係を示す結果は図10、図11、図12、図13、図14、図15、に示す通りである。

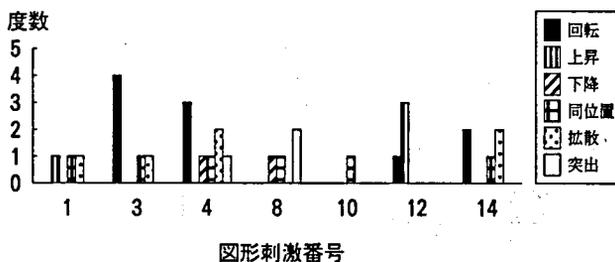
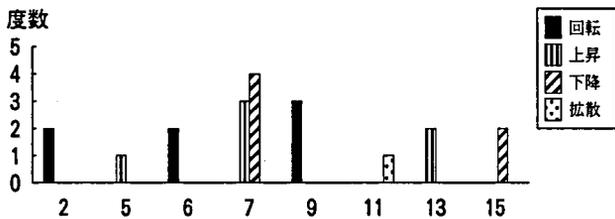
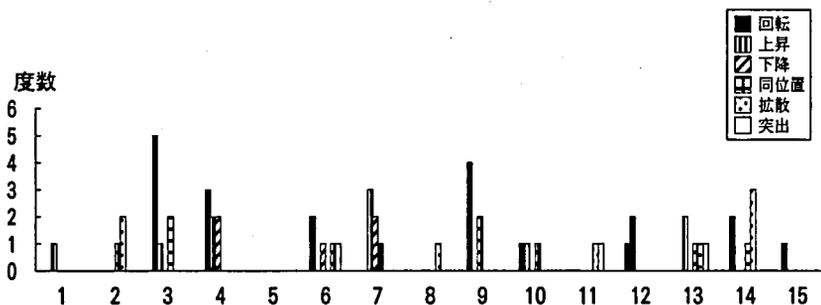


図5. A条件における方向性



図形刺激番号
図6. B条件における方向性



図形刺激番号
図7. C条件における方向性

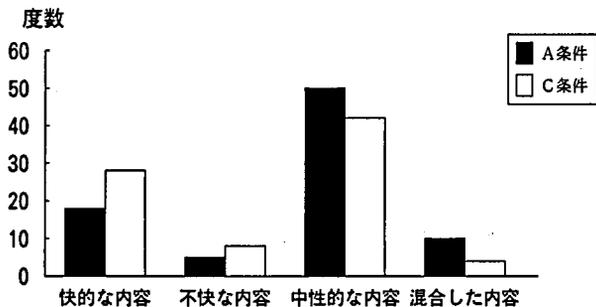


図8. 条件別イメージ内容の全体の比較

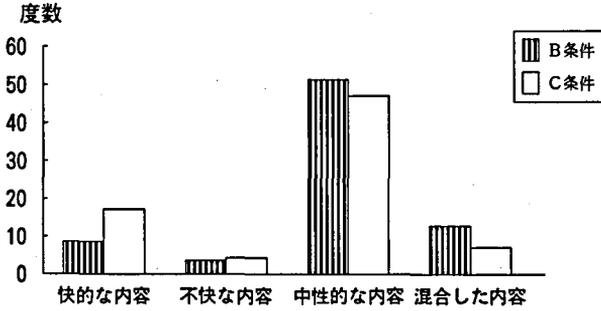


図9. 条件別イメージ内容の全体の比較

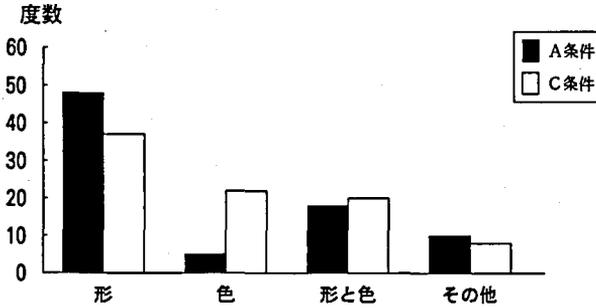


図10. 刺激特性によるイメージの形成の条件別比較

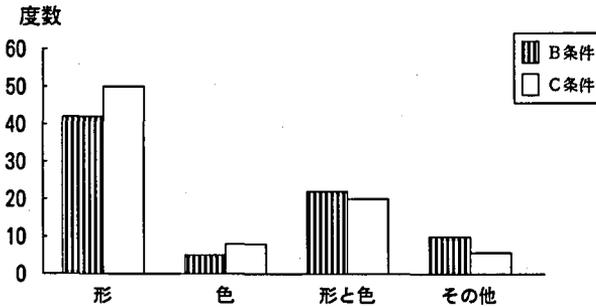


図11. 刺激特性によるイメージの形成の条件別比較

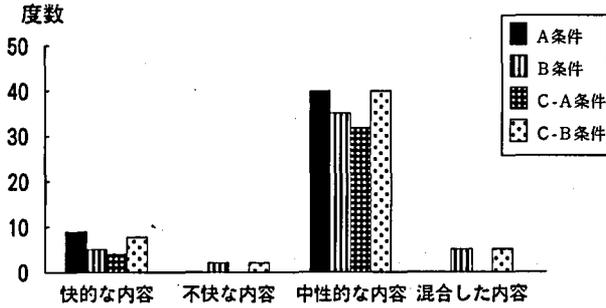


図12. 形に反応したイメージ内容の条件別比較

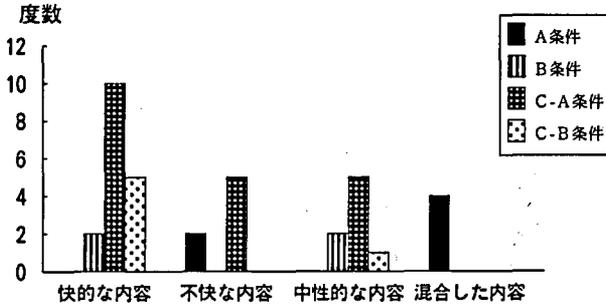


図13. 色に反応したイメージ内容の条件別比較

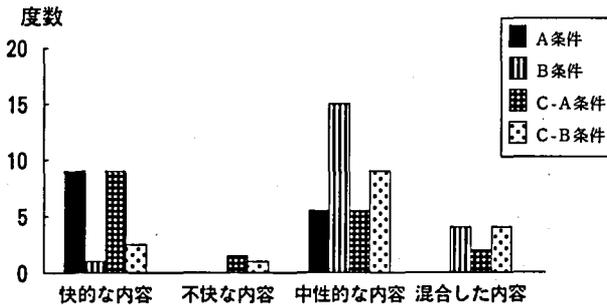


図14. 形と色に反応したイメージ内容の条件別比較

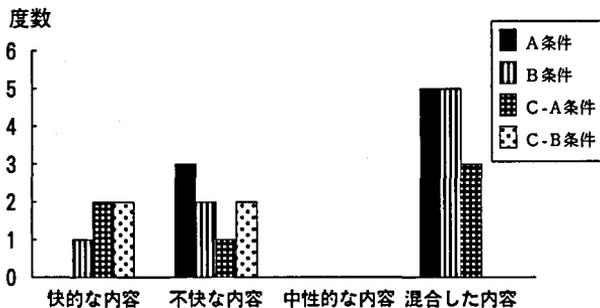


図15. 感覚的なイメージ内容の条件別比較

考 察

これらの結果から継起に伴う方向性とイメージ内容の変化について考察する。

1. 条件別方向性について

A条件では回転する動き、同位置での動き、拡散的な動きおよび上昇・下降方向での動きの投影が多い。特に同位置での振動するような動きと外に向かって拡散する動きの投影の中に黒色図形刺激に対する内的な情緒の表出が現われているように考えられる。さらに、図形4と8で前に突出する感覚を感じる動きが見られたこともこの条件での特徴であった。これも黒色が前に飛び出してくるような動きの感じを投影していることは、情緒的には快状態と言うことを考慮すると力強く躍動する印象として捉えられているのではないかと考えられるし、図形の特性とも関連づける必要があるが、なにか向かってくる不安感のような感じの投影とも感じられる。このことは、この図形に下降方向の動きの投影もされていることから、重量感・重さの感じがあって、下に向かう動きとして感じられている特性を示しているように思われる。

B条件では、A条件に比して、方向性の投影の種類が4種類と少ないことが特徴的である。回転する動きの投影はA条件の図形の特性と同じ様な性質を有

している図形に見られたが、上昇方向と下降方向の動きの投影は必ずしもA条件の図形の特性とは一致しなかった。図形1と図形13では色は異なるが形態が同じである三角形の図形刺激を条件別に比較してみると、B条件では上昇方向の動きの投影が認められたのに対して、A条件では、上昇・拡散・同位置と分かれている。このことは白色が黒色に比べ軽さを感じさせて上昇方向を促しているのではないかと推察され、形態のほかに色の要因が方向性に影響を与えていることを示唆しているのではないだろうか。同様に図形11についても、図形8とくらべると、明らかに方向性のちがいにその特徴が認められる。図形8ではやや不安定感をかんだり、逆に力強い躍動感を感じたのに対して、B条件での拡散的な方向性の投影は、白色の軽さや柔らかさの感じが方向性のなかに感情移入されていると考えていいように思われる。回転する動きの次の図形として静かさの感覚で捉えられ、位置づけられている感じがする。B条件で不安定感と安定感の両方を惹起させ、いわば葛藤状況に置いたのは図形7であろう。形態的な不安定性をどのようにとらえ、情緒との葛藤をどのように処理するかには個体が直面させられた結果ではないかと考えられる。下降方向の方向性を選んだ個体は、図形の形態の不安定性を優先的に受け入れ、内的情緒を抑えながら、不安定感を共有していこうとする態度の現れではないかと考えられる。上昇方向を選んだ個体は、内的情緒の状態を優先し、外的刺激に感情移入して外的刺激から受ける不安定感を取り払っていこうと試みている態度の現れではないかと考えられる。両極端の方向性が示されると言う結果をみると、図形7は葛藤を惹起する図形の特性を有していて、どのように葛藤を解決しようとするか個体の内的情緒との関係の持ち方が動きの方向性の投影となって表出されるように思われる。

C条件では回転する動き、上昇方向、下降方向、同位置および拡散的な動きの投影がみられた。同一図形と比較してみると、図形1では上昇のみが認められ、図形2では回転する方向はなく、同位置と拡散のみ、図形3は、上昇が加わり、図形4では、拡散がなくなり、図形5は方向性の投影がみられない。図

形6では回転以外に下降・拡散・突出が加わっている。図形7は上昇・下降以外に同位置での方向が加わっている。図形8は拡散のみになり、図形9では同位置が加わっている。図形10は回転と上昇が加わっている。図形11は突出が加わり、図形13は上昇以外に拡散・同位置・突出が加わっている。図形14は同じで、図形15は回転に変わっている。これらの方向性をみているとA条件・B条件とは異なる方向性がつけ加わったり、あるいは全く違う方向性の投影がされたりしていることが明らかとなった。このことは形態や色彩のパラエティということも一つの要因であるが、図形の継起のなかで同一の図形であっても図形の継起の中で、個体にとって感じる感じ方や図形の持つ意味が異なってくるとを示唆していると考えられる。A条件に比べると同位置での動きの投影が少なかったり、いろいろな方向での動きの投影がつけ加わっていることは、色や形に規制されない自由な動きの投影の仕方が促されやすかった結果ではないかと考えられる。黒色の重苦しさを最後まで引きずる必要のない状態であったり、白色の形だけのやや単調な連続だけの状態から解放され、自由に色・形を楽しめる状態の流れの中で内的な情緒の多様な投影が方向性の中にも表出されたと考えられる。

このC条件でみられたように、黒色だけの連続や白色だけの連続という枠から開放された自由な感覚での動きの投影が可能になされたという事と、二次元での操作にとどまらず、三次元的な操作を可能にさせているという点でも刺激優位、刺激に反応するというパターンから、継起の中で刺激を自分との関係の中で扱える、つまり主体的、能動的な反応パターンに転換されてきているように思われた。

2. 条件別イメージ内容について

図8、図9に見られるように、A条件とC条件をくらべると快的な内容がC条件の方が少し多いということと、A条件では中性的な内容と混合した内容が多い。両者ともに中性的な内容が多い。情緒的に快的な状態を黒色の刺激特性が相殺するように働いているのかと考えられるが、B条件でも中性的な内容が

多いことを考えると、色彩の問題だけではなく、図形の継起に伴うなにか内的な変化が投影されているように思われる。形態は変わるが同一の色彩の連続のなかで、情緒的にイメージを形成する働きにおいて情緒的な起伏、情緒的揺れが内的なイメージ形成に関与しているのではないかと推察される。具体的にみると、A条件では穴、壁、蜂の巣、石のかけらといったやや不安なとらえどころのないイメージ内容の投影がみられる。それに対して、C条件では、花火、花、メリーゴーランド、遊んでいる人といったイメージ内容で黒い色を明確にとらえながら、黒色を越えて快的なイメージ内容の投影がされていることと、一方、日食、ブラックホールといった暗い内容も受け入れたイメージ内容の投影も可能になっているのが特徴的である。このことはC条件では、黒色に対して、暗い穴、日食、ブラックホール、花火、というように形態と色とを統合させた状態で黒色をより明確に捉え、それらに合うイメージ内容を投影するという主体の能動性が感じられる。また、三次元的に捉えるイメージ内容も多く二次元の平面から立体的なイメージへの転換もイメージへの積極的な関わりと感情移入的な働きかけの強さとして考えていよいように思われる。B条件では、白色自体に対しては、紙といった無機的な反応があったが、図形7の形態に対して、つぶれたかんじという不安なイメージを投影している点を考慮すると、混合したイメージ内容や中性的なイメージでの処理が伺える。イメージ内容では、C条件の方が快的な内容がやや多く、中性的、混合的な内容がやや少ないのに対し、A、B条件では、混合した内容として投影されるイメージの内容にこれらの条件下における図形刺激との関わり方の特徴を見ることができる。黒色では揺れる感じ、広がる感じなど、漠然とした不安感の投影や突出してくる恐怖感などがイメージとして投影されていて、不安な、怖い感情のまざったイメージ内容が特徴的であるが、白色では、くるくる回る、飛ぶ、という軽快な感じの内容とつぶれた感じという不安な感じとに分けられる。これは感覚的な軽さと感覚的な不安感の投影として捉えてみると、混合した内容でも軽い感じのイメージは快的な内容へと移行可能な状態を暗示している様に思われる。

3. 刺激特性とイメージ形成との関係

どの刺激特性がイメージの形成に主として関与しているのかをとらえるために、イメージ内容を刺激特性別に検討した。形のみ、色のみ、形と色が結合されたイメージ、その他感覚的な次元でのイメージと4種類に区別した。A条件では、明らかに色を避けて、形に反応していることが分かる。形と色の結合ではキャンプ・ファイアー、桜の花、遊園地というように、黒色が妥当というよりも黒色を意識しながらも黒色以外の色合いも可能なイメージ内容が多い。C条件の同一図形では、色に反応するイメージ内容が非常に多い。内容的には、黒色を受け入れながらそれをどのようにイメージとして昇華させていけるかという試みがみられ、A条件のように黒色に圧倒されて避けていくという傾向は認められていない。黒色一辺倒のつづく系列では、黒色をどのように処理していくかが実験中個体に課せられた課題とも言える。全体的に色に反応したイメージが少ないということは、色をさけていると考えられる。その理由として、黒色からの不安な感じと、圧迫感と内的な情緒状態との矛盾・葛藤を解消する手段としてその刺激特性を避けるという方法をとったものと考えられる。図11の結果からでは、条件別に顕著な差が認められていないことから分かるように、黒色という色彩のもつ意味が明らかにされてきていると思われる。

それぞれの刺激特性とイメージ内容との関係をさらに詳しく検討してみる。形に反応したイメージ内容では、条件別に比較しても条件間・イメージ内容間でほとんど差がみとめられていない。この場合では、形を優先し、感情移入の少ない中性的な内容のイメージの投影が多く見られている。色に反応したイメージ内容の比較では、快的な内容がC条件で圧倒的に多いことが特徴的である。また、不快な内容はC、A条件の順に多く、混合した内容はA条件のみであった。このことはC条件では黒色・白色の組み合わせの継起の中でうまく黒色を昇華させてきていることが分かる。図形刺激14の黒色の円形図形では、暗さが強く感じられて、不快な内容を惹起させている。円形は安定した図形の形態であると考えられたが、安定した形態であるが故に、黒色の不安定感が強調され、

その不安感をどのようにイメージの中で解消していけるかということになろう。A条件では内的に揺れ動く感じがイメージとして混合した内容として投影されていて、不安感をどのように処理していこうかという不安定感の現れであると理解できるだろう。

色に反応したイメージ内容ではC条件において快的な内容が最も多く認められたが、それ以外の不快や中性的なイメージの投影もなされている。A条件では不快なイメージと混合したイメージだけの投影で、快的と中性的イメージは投影されていない。これらのことを考えると図形の継起による黒・白の変化が黒色に対して多様な感情の移入を可能にしている事が分かる。混合したイメージ内容と言うことは、黒色の連続の中で黒色に対する不快感が徐々に薄れ、不快感からの解放の現れとして混合したイメージ内容が出現してきているのではないかと考えられた。白色に対しては、B条件ではあまり色に反応するイメージが惹起されていないが、C条件の黒色との対比的な関係で白色を捉えた場合、快的なイメージの出現を促しているように思われる。

色と形のまとまりとして反応したイメージ内容の特徴では、A、C条件とも類似したイメージの投影の傾向をしめしているのが特徴的である。黒色だけでは反応できなかった快的な内容のイメージも色と形を統合した状態でとらえる場合には、黒色の色から受ける抵抗感が少なくなって、形に融合されていることが分かる。B条件では、感情移入の少ない、中性的な内容のイメージが多いことは、黒色とは逆に、白い色の無味乾燥したイメージ、色を意識せずにすむイメージとして捉えられていることが分かる。

4. 図形の継起と動きの方向性・イメージ内容について

すでに述べたように図形の継起が動きの方向性を規定する一つの要因であることが明らかとなった。A、B条件の系列に対して、C条件のように2種類の色がランダムに提示され、形態も均一の系列よりは多様性に富んでいる系列において、個体は、多様な対応の仕方が可能であり、図形の継起と共に内的な情緒の投影として動きの方向性の中で操作的に自由に方向を変えることができや

すいことが判る。方向性とイメージ内容との関係についての分析は今回は詳しく行っていないが、方向性に投影されたイメージの内容をみると、同じ上昇方向を示す図形刺激に対して、情緒の開放のされ方に違いが生じていることが分かる。図形の継起の流れは個体の情緒を継起と共に、継起に沿って、徐々に開放的な方向に変化させていくことが分かる。今回は快的な情緒の状態で行っているため、図形刺激自体が不快な要素を保っていても、徐々に楽しい気分へ転換することができたり、不快な刺激を不快として受け入れることに抵抗が少なくなっていくことが明らかである。黒色の均一の図形系列では、おそらく不快な図形刺激要因から生じる不安感や落ち着かない感じなどをどのように処理すればいいかということに全力が傾けられ、それらに対抗する手だての1つとして動きの方向性にその投影の特徴が現れているのではないかと考えられる。

このことはイメージ内容についても同様で、黒色に対する耐性の強化とそれに伴う自由な感覚での能動的・積極的な関わりが増大がイメージ内容に多様な色合いを付加させているといえる。個体が同一の刺激状況に長時間拘束された場合、内的にさほど不快な感じでなくても、その刺激自体が不快な感じなどの内的情緒状態と異質な感情を喚起させる場合には、それらの処理のしかたや対処の仕方に受動的で消極的な反応様式が顕著になっていくことが推測される。したがって、日常的には、あるていどさまざまな情緒の起伏の中で、それらとどのように関係をもっていかを経験しながら、自己の情緒を統合し、統制していくことが個体の情緒や感性を育てていく上に大切になる。

(本研究は1998年の第62回日本心理学会で発表したものに加筆・修正を施したものである)

参考文献

門前豊志子 1983 彩色・無形色図形におけるイメージの投影について

信州豊南女子短期大学紀要 第1号, 55-72.

門前豊志子 1985 彩色・無形色図形に投影された動きの方向性—その意味—

信州豊南女子短期大学紀要 第3号, 51-63.

門前豊志子 1993 情報状態と動きの投影(3)-動きを感じる時と感じないときにおけるイメージのちがいについて- 信州豊南女子短期大学紀要 第11号, 49-63.